大和名所図會

巻之六 坤

大尾

ル 4
5326
7

竹林院 時雨社より西南の方社金剛寺の社宮坂町にあり 當院に頼朝卿乃御教書

一章 義経追討の書簡なり 射御新流の一巻あり 院内位牌の内射御卿乃名誉あり 吉足和尚

米田兵門家

なりといへり

樓谷椿山寺 釋書曰藏上人修行の地なり 京師乃人多し 然れ

二丈の椿ありなおろし通賢法師といへるそなり 協穀

分断く延喜十六年二月より六年の精修分終らんとする其時毋君乃

中臣ひのおりたなかの宮くに故郷より来寺多し 密教分学ひ

其ほ吉野山に入る生窟ふ

住持ひしとかや

布引櫻 さくらかいと

吉野紀行 布引の橋ありて根より谷の底まくさん

つくくさんくかりぬ

布引ふしをたとへて芳野山名ふ人ふりにの一日 花井雅章

天皇橋 天皇櫻 梵天社 猿丸坂

雨降横観音堂 にみやこをのひしに

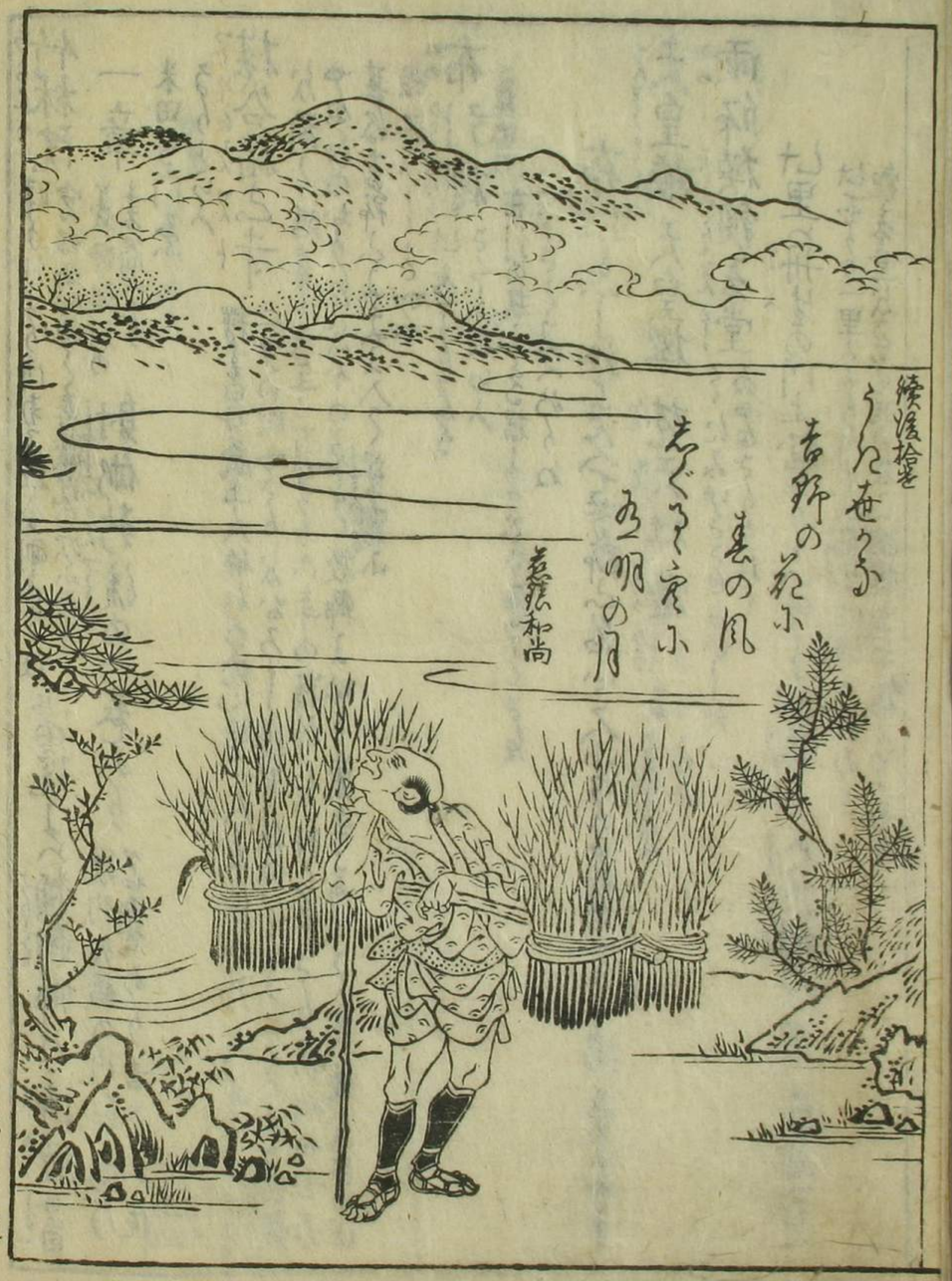
十里八丹生の川上祭りしいのくに 時雨乃宮

山おろより一里ばかり川下小丹生の社の社あり

観音堂分るく西の谷より猿橋 井橋といへり

後醍醐天皇

門ル 4
號 5326
巻 7
49-1893


續後撰集
うら世ふる
吉野の花ふ
春の風
さゞなみふ
み吉野の月
素盞和尚

瀧桜 雲井桜 瀧桜は谷のうちにあり 雲井桜は其つぎにあり

吉野紀行 瀧さくらを
いはまより落くる花の瀧櫻花の波こそみよしのゝ山 大納言雅章卿

同 雲井桜と名におひてえだの上にかゝれる
なほ法(?)さへわかれゆくもおほしなの雲井にかくるみよしのゝ山 仝

中院谷 花矢倉 此下に桜本坊 大将軍社 清滝権現社 辻堂あり

此谷は源義経身をかくされし所にて人に山をしへて龍のをとしかへて
ひと岩ありこれを佐藤忠信がはかりて横川の覚範の討と
けり所へ又忠信ぬせ花矢倉にして此所へ

鷲尾山世尊寺 獅子尾坂のうへにあり回禄の後 本尊は釈迦仏 校倉あり 形をうつせる堂あり

阿難迦葉の拵此本尊は欽明帝十四年河内国泉郡茅渟海
中に梵音ひゞきて雷声にたぐへて光耀として日輪の
かゞやくは奏しをする帝あやしみて溝辺直に勅して見せ
しめらる直茅渟海に入てみれば樟木のひかりにあれる是
をとりて奉りしかば佛工に命じて仏二躯を作らしむ

今の吉野寺の樟木の仏像是なり 日本紀 日本紀 像の

釋まふにあり古鐘あり銘曰保延六年十二月播磨守平朝臣
忠盛 云云 此所を霊鷲山にひとしとて

月清集
鷲の山御法の庭にちる花をかくしてや嵐のさそふらん 後京極良経

居の尾 花矢倉の上にあり 人麿塚 鷲の尾比傍にあり

子守神祠 大宮 三座 住吉同殿にして吉野八大神祠の其一 回禄の後豊臣秀頼公の再建 社檀(?)美麗にしてお殿のお社は将軍家綱公の寄進

夫木集
吹わたる風も芳野の秋萩にちるもみぢぞ神風

吉野紀行
みよしのゝ山のもとつ端におひそめてちる宮の花をとる 大納言雅章卿

牛頭天王神祠 吉野八大神祠の其一なり 高算上人遺像堂 毎年二月一日の花供懺悔法を此上人の
さだめおかれし今に

高城山 俗に城山といふ大塔宮ここに籠らせたまひしといへり
高城山とも又此木にもいひ伝へける

万葉
一山芳野の高城の山に白雲はゆきはゞかりてたなびけり見ゆ 釈道興

拾玉
みよしのゝ山の花谷を越えてとうぞ又いづれの人見ゆる 慈鎮

躑躅岡　遥谷

法華堂の東なり

わかふかの谷　法華堂の東なり　井のつゝ　園の西ふかくなれて　太納言頼朝

むりんの谷　ふかの谷　法華堂の東なり

同

こゝわかの谷　こゝわかの谷　戸も花ふかくこゝわかの谷　仝

岩倉谷　相模守の屋敷なり

金精大明神社　神名帳曰金峯神社吉野郡の地主神なり　金御嶽の號

又云同年の秋八月　興福寺記内三代実録曰貞観元年正月正三位を授く

一云又同年の秋八月　興福寺記内三代実録曰貞観元年正月正三位を授く

金御嶽　吉野郡の一名なり又こゝの峯又仏ゝみなとなり

拾芥抄曰金峯山　黄金あり　慈尊　弥勒菩薩　出世の時閻浮提の地ふの人民

みなこゝに蔵王権現のはりまを釋書曰聖武帝の御時行基菩

薩正はしの金を深んかゝて金剛蔵王ふのかれしかたちを彫

りけるを洛七條ふかの人信りる前ふかけこの前ふかの

極ふ金嶽くと文字あり　方与集

彩色ようひ紀の川上ふ金御嶽ふ者ふりふけを　顕昭

夫木

神のまゝこゝ社ふ　のまゝこゝ　鏡ふこの社と云ふ　信實

蹴わけ塔　金精大明神のたれ奥おく坂を下りくりはあり　陰家と云

追分ふ来ふこゝ分蹴わけ　塔を泥塔の通ふ建しこゝ義経ふ塔の内ふ隠れし　弥勒

殿走りしこゝ　下谷宮殿のまゝ人居りきこゝ　高野の

飯高ふ安楽寺寶塔院本尊ふ一丈の蔵王権現又役行者の遺像

分安楽寺奥院四方正面堂　安楽ちのこゝ　奥ふあり

其傍ふ蔵王堂あり

青根我峯　安楽ちのこゝ　訪之ふ来の谷ふ義経ふ

彩撰

吉川太郎

佐保姫の春こゝ新ふ奥ふこの青根ふ峯ふ苔乃むしろふ　公実

佐保姫の春こゝ新ふ奥ふこの青根ふ峯ふ苔乃むしろふ　教政

ひるがへる
魚籠
うしやの
家うし屋
肌うりうれ
おむすび
ちうん
蘇書

苔清水　西りの法師の庵室あり正面堂より西ふかく堂の後より流あり
苔清水とて人家家より西の方二町ばかりとり〳〵下に真名の小川に小滝あり
画像あり山部赤人の和歌多し　さくれば山勝景なれども清風花
新してんは白雲なれど蒼苔巖に封じて冷々滴つて幽
遠閑寂々〳〵遥に塵寰なれど隔川掌に西行上人こゝにを乃
置庵なれば真に居行人真に香爐峯に結びし樂天が草室
もいひはべる

山家集

清くともよしやさむくもあれ我ふるさとの井乃水　西行上人

西行法師山ふかき谷のあなたに住わびて侍りしころ
花ちりぬべきよなれば
吉野紀行

花ふりて思ひまがへる白雪のたゞ一ことの答　飛考井　推三年

泊船集

西行法師の庵室の前に清水あり烟雨谷なれば
然の家ちかきゆへ西行法師の庵室の
うつしをぼえる院その後乃奉心れ庵
こゝに入むかしより山に入る世なれ
る人のおほくこゝに行りの名を奇
いなぐや庵主乃庵山といふもまた
ゝ

ある時小一夜なりけり

破れ垣くゝりもれ小ぶるせよ　坊の妻

西上人の家はいかりのあるこゝの入程茶人の
より右の方二町ばかりなる道のみちをこゝさりて
谷なれば道のみちをこゝいと多くこゝ
少くこゝ乃清あるもむ
ひとりぶくく今も
来為乃

露少くこゝ小ぶるに世をこらだや　仝

若是技業小伯夷あるこゝ
口なもんをこゝと詳由小生
耳なあるこゝ

凍あるく笠小吸干に清あり式　仝

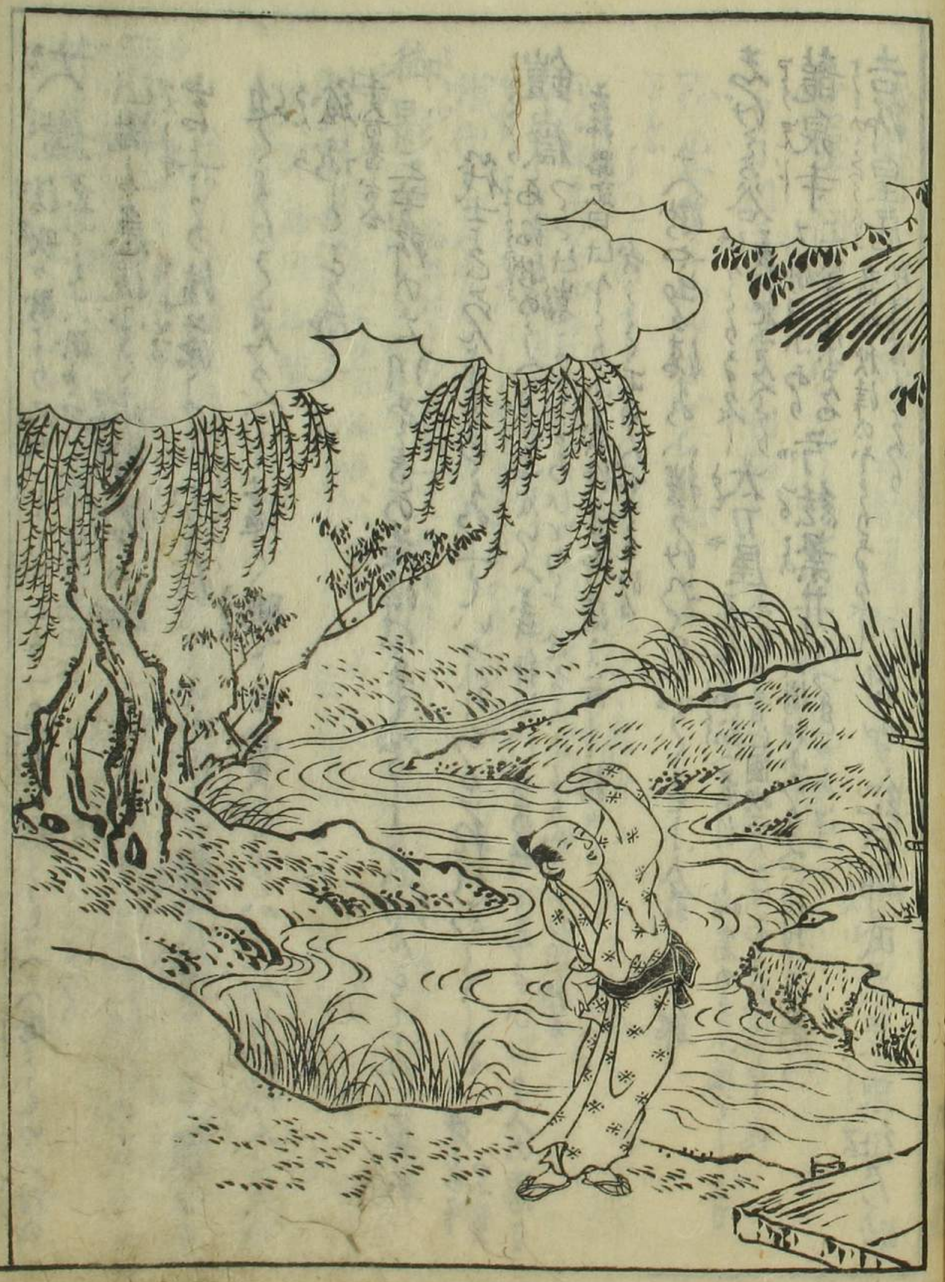
苔清あるこゝ小ぶるこゝ外小ふかこゝ　湘夕

情吟瀑布　西行村小ふり山瀧々峨々こゝる岩間こゝる張落は九八十
もろあり瀧のこゝ岩の間小瀧あり山岩のめぐりなる情吟乃小野と
いへこゝ山情嬋が瀧こゝあるこゝ清明が滝こゝ書

[illegible]琵琶[illegible]ことにて仕滝の末分音無滝のごとく
名所の名ゑ[illegible]川を紀州熊野ふわり
義經記曰こゝに熊野一のあり吉野川の名上末[illegible]
牛ゑ[illegible]滝の糸なみ[illegible]
の滝の上[illegible]遠し[illegible]
[illegible]石の[illegible]
山[illegible]滝が滝なり[illegible]
彰考館撰
代くとゝ[illegible]吉野川[illegible]落る滝乃白糸　延喜御製
彰後古今
[illegible]吉野の滝も波やそ[illegible]　源義経記
彰後十載
[illegible]吉野乃滝の[illegible]　勝俊二位
[illegible]滝ふ吉野
[illegible]
[illegible]川上の小野[illegible]　上川の荘　村ふあり　むら雄　男天皇四年[illegible]野の宮ふ行幸ありし
[illegible]川上の小野[illegible]御狩あり[illegible]帝も射給へ[illegible]弓ふ携へ
[illegible]新ふ[illegible]花ふ[illegible]天皇の臂ふ刺[illegible]ふ忽情玲むし花末
[illegible]其花[illegible]花ふ[illegible]
[illegible]天皇[illegible]ふ情玲ふ

さゝはの川ふ　狭猪　待也　[illegible]　竹原　[illegible]　我立　[illegible]　蚍未　未也
そのあぬを　其蚍　あぬ　蜻蛉　蜻蛉也　[illegible]　昆虫　[illegible]　大君也
[illegible]川ふ[illegible]人　謂仕　[illegible]　名形　[illegible]　置　[illegible]　秋津島　大和也
[illegible]
[illegible]情玲ふ[illegible]情玲小野と我名
づけ[illegible]　[illegible]おはくお器[illegible]
彰後撰　[illegible]日本紀ふ[illegible]
彰後十載
[illegible]ふ[illegible]　名家
[illegible]夕白[illegible]ふ[illegible]
[illegible]
或曰[illegible]の小野[illegible]の岡又[illegible]の小野[illegible]の秋はの秋れ初風　[illegible]
顕昭曰情玲ふ拔津と讀之拔れ[illegible]の小野[illegible]
[illegible]
[illegible]
白倉之[illegible]村の上方ふあり　怪石巖　巖多
無吉川　[illegible]吉野川ふ[illegible]川二三町のあ[illegible]
[illegible]下半月ふ上流ふ[illegible]
[illegible]異[illegible]

彩法拾き
いろうしたる秋はふ
かれ芝は
かびさも
あへぶ
うれ名
えゝん
乃春法師



大瀧　瀑布ノ瀧より八町ばかりふあり一名西河瀧ともまた大瀧ともいへり村の名をも大瀧とよびて顕注密勘曰　おのゝ大川のべとまりの山瀧ゝ急流ゝく水勢岩ゝ觸く漲落ゝ流ゝ岩上より流落ゝるさまあるべし岩間ゝ漲落ゝ沸ゝ岩間ゝ漲落ゝ沸ゝ岩上より流落ゝるさまあるべし遠く眺てゝ賞するゝべし筑人ゝ公

近くよりて見るべし遠く眺てゝ賞するゝべし筑人ゝ公

羅城門　千六百番歌合

二芳野の大川水をの後法はれ春も惜しき春ぞかなしき　家治

筏士ゝ公ゝ

鎧嶽　西河瀧の上にあり　連歌師宗賢

つさけ嶽ゝ

吉野路記曰　けやきゝ義経吉野にこもりしとき義経けいの竹をきりひむろの岩ゝ

吉野路記曰　けやきゝ義経吉野にこもりしとき義経けいの竹をきりひむろの岩ゝ

大瀧や生る清水ふ猶ふけ

きびきゝ公

義経記ふくべし　太刀屋　義経西河瀧にこもりしとき宿の主ふ為てし太刀今小田青江國次二ふくすあり故ふ名ゝ

龍泉寺　大瀧村ふあり　二代実緑ふる弓絃巣井　大瀧村ふあり又六田村にもあり

吉野皇居　舊址秋津のかたにあるべし　日本紀曰神武天皇東征乃時

紀伊國ゝ行ゝ吉野ふ生ゝ

宮軍ゝ調練ゝ行ゝ吉野の宮ふ定ゝ其後應神天皇も吉

ゝふ御幸ゝ國栖人ゝ奏ふ

野の宮ゝみゆきおこなひ

ゝ人のうたとしてゝ吉野ゝ

詞林採葉曰吉野宮ふ神代ゝ

御影石　塩谷村ふあり高一丈餘南帝王の祠ゝ称ゝ後醍醐帝ふ七の宮ゝ

所本邑の郷民大石助久帝ゝ殺ゝ此ふ

神社甲冑ふ獲ゝ神主ゝ毎歳祭祀ふおこなひ

小瀧村ふ川ふあり

のりたゝ公奥の山の中の戸ふ心をあらくだきとも

琵琶ゝ　多古村ふあり瀧二流あり高三十丈大瀧ゝ

井光宅址　碓村ふあり由緑吉野邸の

釋迦岩窟 和田村ふあり 深サ三十丈

國見ヶ岳 伯母谷村の西南ふあり 巖窟峰へ林立深くして山路險しく人跡絶えたり西南が總て峯中なり

笠岩室 國見ヶ岳の山腹ふあり 十所々日藏上人のこり給ひし所へ日藏宋

崔院の御子母ゝ 感衰記 得道の後右所と構へ寺ふ住し後ゝ笠

窟ふ入給言斷給ゝ冥土ふ赴り給ふ藏王菩薩金峯山の淨土

と月給ゝ去給ゝ日藏九九年月王護の短札ゝ身ふ

菅神ふ向月人なりゝ所の短札八字の註釈とゝ道賢の四名ふ

わゝゝゝ日義ゝ狂名とゝ地獄を巡り月給ゝふ鐵窟

ふ人わゝゝ曰我ゝ大日本國主金剛覺大王の子ゝ菅丞相

配流のゝゝみゝゝ佛寺ふ燒有情ふ害せり其重罪我身ふ

うけゝゝゝ汝本國ふ帰ゝ一万の卒都婆ふけゝり供

養ゝ我若患ふたゝけゝゝの寶ふけゝる釈迦如來卒都婆内院を月給

ゝ聖天の妙樂ふさゝ 感衰記 拾ふ十二百ふ拾ゝ接せゝゝ其後彼卒都婆

内院の樂ふ和朝ふ傳ゝ見佛會法樂と字ふ 一説ゝ六の樂々中華より傳ゝる曲ゝりゝもゝ

日藏上人岩窟ふ籠ゝ月給ゝ四五百歳ふ居ゝ日給ゝ鬼神來ゝ

ふ量億功のゝるゝみをのゝれゝ給ゝ頼ひしゝの字治拾遺ふ月給ゝ

寂莫の苔ゝ岩戸の内々ふ涙乃雨のゝゝ日暮給ゝ 日藏上人

金葉 年の落ゝ伝の落ゝゝゝと忘ゝ月給ゝ岩窟ふ神ふ祈給ゝ 傳正記

千載 大峯ゝゝ伝ゝ月給ゝ年ゝ岩窟ふ住給ゝ

宿ゝゝゝ讀伝ゝ月給ゝ

宿ゝゝゝる岩屋の庭ゝ苔遥ゝ荒ふ成ぬゝ秋ふ

玉葉 いゝ年ゝ雨ふ袖の濡ほるゝん

風雅 ゝ年ゝ月給ゝ岩屋のむゝ

彰考拾遺 ゝ年ゝ月給ゝ岩屋の名とゝ

みぐゝゝゝの岩屋ゝ月給ゝ

岩屋ゝゝゝ月給ゝ雨ふ濡ゝ月給ゝ岩屋のほとゝりゝみぢゝ

ゝ家集 ゝ月給ゝ年ゝ月給ゝ月給ゝ月給ゝ月給ゝ月給ゝ

朝日岩窟 鷲岩窟 共ふ國見ヶ岳の山腹ふあり

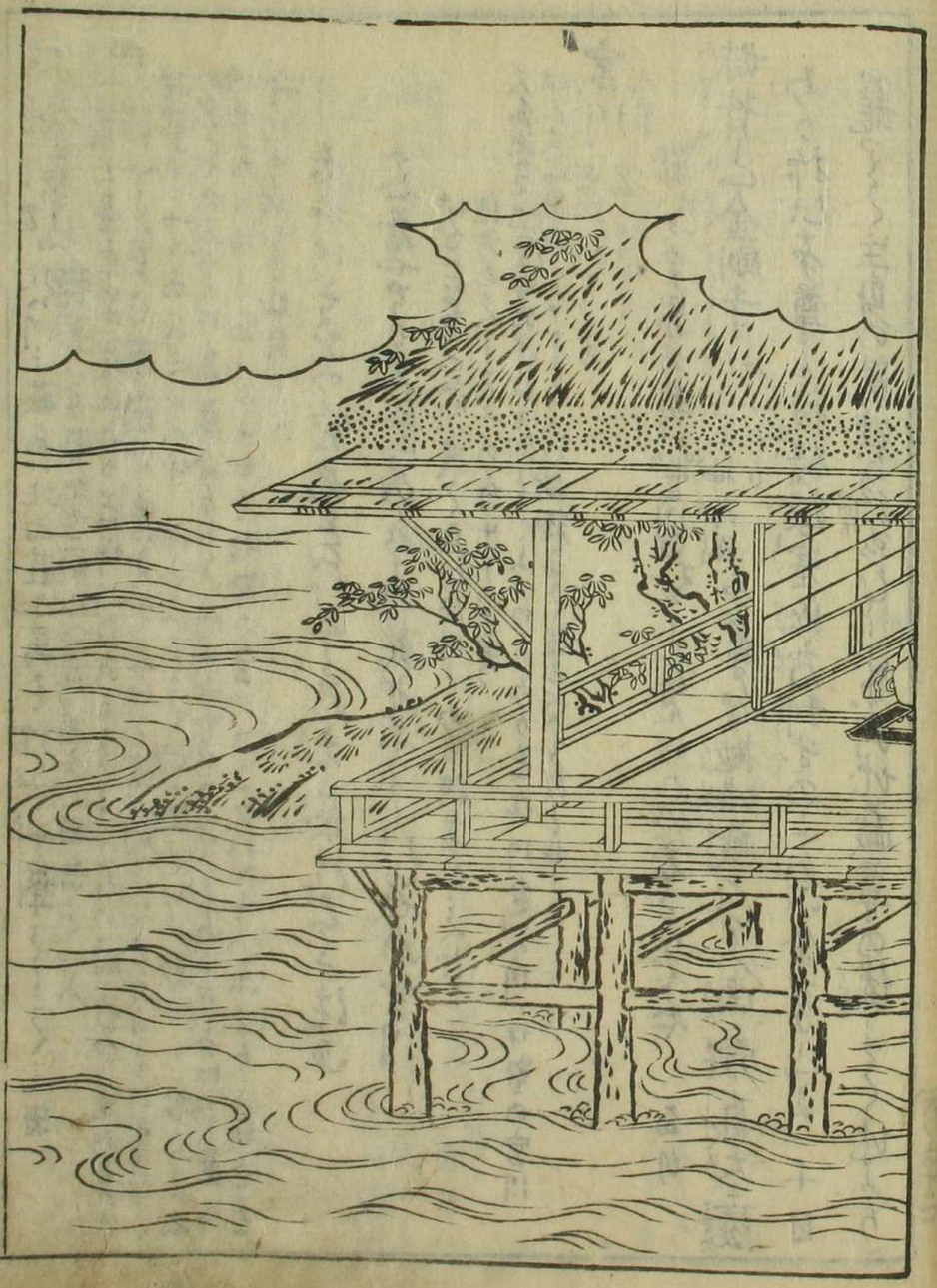
荒大傳正 賢人忠

普光園入道 荒園白左大臣

靜仁法親王

荒大傳正 良業

みちのくの
ふかめし
谷の
かうらせば
ちぢのみだれ
佛掛
清長宗左百手摺製



大臺原山　北川上莊西北と莊ふ屬を弥岳鞍峯くくと樹
鬱蒼くり勢紀の二列ふ分ふ故ふ之國岳とい
巴淵　大臺原の巴嶽ふあり吉野川の名上ゝくく人の通ふ所あるべ
深沢あどゆうの名ゝその中　いとふくくく巴が淵といふあり　風こゝぬ
けぐそのたぐりの毒蛇はりくくいの水のさかるゝふりあり　無吉野
川の名なはゝ西ゝりけぐ仏勢の宮川のかぐれをゝ東ゝりあり　吉
野の水かさはにしゝ

吉野川その名上なるをゝむくゝ乃東萩花ゝ生ゆ

大蓋やゝりゝにゝ記ふ載くあり法師とあり撰集にゝ
後考あるゝ又上の奇出書未考
大和巡覽記曰大蓋原小巴の淵くくふゝあり吉野川熊野川仏勢の宮川
山ゝ大仏の名上ゝりとゝゝ虚誕くくゝ信ゝ

宮川　吉野川名上の
山家

懸ちつる吉野の奥ゝ宮川のむくゝ分見けんゝ名ゝ　あり
妹背ゝ金剛寺　川上莊神野谷村ふあり　本尊が地蔵とゝ人南帝自天王陵
あり拝ゝ本尊ゝ役優婆塞海度利生のゝゝ金峯ゝ一千日
籠ゝくく生身の薩埵ふ祈ゝひゝふ地蔵尊の像くく地より

より國栖ゝ吉野の時ゝ聲くくゝ神言ふ中ゝ分笛ふ吹くゝ糸ゝ
ゝ義の奉くゝ中くゝ五郎始くくゝ
吉野ゝ記曰大海より國栖ゝ一里あり清原天皇ゝ訪ゝ蔵ゝ
義鮎の雛ふ神調ゝ供神の鮎りふあるべふ下ゝ分門ふ
ゝ君神代ゝ生ゝ鮎ふ魚ゝ
そのまくゝ人ゝ
とくゝ義ふ國栖の檀正ゝ
今ふ末くくゝ校正とゝ
吉野記曰國栖とゝ人内の郎今ふ笛ふ人の伝訪ゝ

ちくくゝ吹ゝ人ゝ國栖の笛ゝ花今ゝ多ゝ　大納言雅章

御垣原　清原天皇おゝ一ゝ
ゝ名ゝ
ゝ海拾日神垣原ゝ名訪ゝ
ゝ神垣ふ

古里の月埴ふ原ゝ
ゝ秋の末ゝ　家隆
後撰撰　春ゝ人ゝ
ゝ神垣ふ原ふ萩花ゝ　後成
新後撰　今ゝ人ゝ萩花ゝ
玉葉　右の中ゝ
ゝ神垣ふ
ゝ　乃氏

後後拾遺
白妙の袖ふる雪
若なつむ
佛塔の
京の
梅の
ちる花
定家

耳我嶺 窪堀村の上方にあり山勢盤紆すること幽勝の地なり一説に吉野
万葉 山の異名なり八雲御抄云吉野山の耳我嶺といへり
山辺方吉野の耳我嶺に時なくぞ雪は降りける間なくぞ雨は降りける 清原深養父
加茂真淵曰御岳嶺てふ意なるべし
うねあくん御金高と云ふ
みも美金の多きなるべし書紀に皇朝のむかしゆくりなく有り
こがね○をくにつけんあらんなる坂人ゆくりなく有り
迎記に大和国のうちなるものの耳我嶺の金山の理のうるはしい
考へごとしとあり
金分理長く弥勒の出世分佛とあり
小松原こがねうり

國栖山 南國栖村の上方にあり峯巒疊巘四時蒼翠峯々より山下に清流あり山中に神祠あり
小牟漏岳 小村の上方にあり青峯高く聳へ溪谷巒巖に遊び山中に神祠あり

冊生神祠 小村にあり小川莊七村の氏神なり祇園寺あり

象山 喜佐谷村上方にあり八雲御抄曰象山象中山象山象の名所にあり
万葉 迎記に象山象の名所にあり
象山のさきのたをりをたてるれいく杜鵑なくなん 為家卿
新後撰
法皇ふかくて紫杜鵑なきぬこゑは法乃すみしてせしか 順徳院
玉葉 大和物語に紫つき道に紫ふりて象の中山中なくも 行家

象小川 多源青根嶽より流れ外象樹分過ぐ
王葉 吉野川に入
むかしみしさくらの花の今さかりなりけるかなとぞ成ぬる 家持
夫木
よしの山青根の嶺に月出て象の小川に五我志の月影 知海
假寢橋 一名外象橋
夫木 八雲御抄に出る
橋の名なれば寝ても夢に人のゆくらんかよふ 為家卿法眼
櫻本神祠 花供谷村にあり
吉野記曰 櫻本の宮は宮瀧の西にあり
瀧のいとすぢ織出しるやと雖にお伺へられた
瀧の糸なれはかちなくしらの山櫻織る櫻本乃宮 花乃井 雅章

箕川 吉野川菜摘村に至りて菜摘川と云へり
万葉
吉野なる人妻實の川乃瀬の淀に瀬ぬること法みしく 湯原王
續古今
よしのゝ川のもみぢ葉ながれてのこるかげ見えぬ 中宮内侍
新後撰
ふつみ河川吉野なる人妻ふと法をくみ明てなく明る 院御製
續千載
ふくけやふつみの川の瀬の明の風の波に氷を法 権大納言定房

花籠水　吉野山記曰菜摘里ふる花籠の名ゝ〻く名水あり
吉魚張　ふつゝ里のゝ〻ゝりうるべし　万葉詳
我宿の清菅　万葉
右魚張の夏身のゝ人のとゝ出くゝ見とゝきる門の彩ゝ　家持
御舟山　菜摘里の東南ふあり外よりこれを見るとてゞ叩くゝ舟のゝ
坂路甚多陰ゝ　藏王堂の名所の東ふ見くゝり
万葉　激のゝ人ゝ舟ゝより杖はゝ見ふとゝ〻てゝるゝ神無月
勅撰　みゝゝ山ゝ御舟のゝふ立ゝ雲の紫ふあゝむゝ我見るゝふ　人麿
勅後撰
激のゝふ流ゝ波あゝゝ吹御舟のゝ乃掛ゝりけゝ　正二位藤氏
後拾遺
ゝ山ゝ御舟のゝふ立ゝ霧の奪ゝふ上て時ゝ日出ゝ　後頼朝臣
右
立ゝ雲の波ゝ山ゝ月ゝ出ゝ舟のゝふ秋風吹　平源時
樫尾山　樫尾村上方ふあり古郡ふ日暮ゝ
佛ヵ嶺ゝもゝ
後撰
日ゝゝ山ゝ出ゝ立ゝ雲ゝ小ゝ嶺ゝ　菅原左大臣
日晩郡　中莊菜摘村ふあり

亭子院宮瀧ふ御覽ゝ行幸ふつゝまけつゝく
勅撰　日ゝゝ郡ゝ行ゝ立ゝ雲ゝ　郡とゝ山ゝふ
日ゝゝ郡ゝ行ゝ立ゝ雲ゝ　妹ゝ待ゝ山ゝ　大納言羽
川上鹿鹽神社　樫尾東川南國栖二村の界ふあり今大義明神と
称ゝ國栖莊七村の氏神ゝ神名帳出
樋井坐神社　樋井村ふあり是日宮ゝ称ゝ中莊七邑
氏神名帳ゝ出
宮瀧　宮瀧村ふあり
兩涯清麗ゝ　怪石磊砢ゝ南の岸ふ巨石あゝく
壁の如ゝ流下九重淵ふ臨ゝ　善水練る者石頭より飛中ふ投
ゝく流ゝふ隨ゝ下流ふ生ゝ　飛激ゝゝ人ゝ壯觀ゝ
代々の帝もゝ行幸あり
菅家御詣　昌泰元年十月廿五日宮瀧ふつゝく遊ゝ立ゝ日ゝ暮る
ゝ雲ゝ其激のゝ清ゝ波ゝ立ゝ日ゝ暮る
いゝゝゝ流ゝ立ゝ石ふ町ゝ立ゝ　称ゝ
大石ゝ石のゝ見ゝ石ふ立ゝ石のゝ見ゝ中ゝ流ゝ
後撰　法皇宮の瀧ゝ行幸ゝ
ゝ日ゝ石ゝ立ゝ　下畧和歌撰集ふ載ゝ
菅原右大臣

和州巡検記曰
宮滝の傍にあり此方に
大岩あり其向ふ
吉野川なり〻
此岩に大なる岩
あり岩のえさ
みるとうり屏風
とをつくるがし
此岩の石川に
度さこうるぐり
せをたゝかはあり
大石のうへにむく
せをたゝかの水を
流し其景絶妙
里人岩龍と
岩のうへより
水底に龍入く
川下にゆくを

やく人ふんを
後をうて龍
をとらんとあるを
見て龍入
とあらせて龍入
水中に一丈ばか
入てあるを
をとれば蛭を
出るとしらず

後撰

宮の瀧むかしも名のたかきかな　法皇御製

同

秋ふかはるこのみや宮瀧の花れ白波たちそそらん　素性法師

續拾遺

宮瀧の滝はみるとはなくとも　出羽守[illegible]入道摂政

山家集

瀧かはるこの宮瀧川の波もりそへんの花もむかしをもとる　あり

新古今

仏のそのの波かくれと宮瀧や桃のわるかうへ　行家

懐風藻曰　萬丈崇巖削成秀千尋素濤逆折流

遊吉野川　欲訪鐘池越潭跡留連羨稲逢槎洲　紀雄人

友非于祿友賓是飡霞賓從歌臨水智長嘯樂山仁

同

梁前招吟古峽上簧聲新琴樽猶未遊明月照河濱　藤原萬里

清滝の原　宮瀧のひろ[illegible]

万葉

くるしくも暮しの日数を吉野川清滝の原分れとわるくふ

千載

曉ふるちやたちのこん月影のはるさの原ふちとりふくうり　右大臣

新古今

むしろの夜れそりの秋はる清滝の原ちとり秋くうり　志人

簀橋　宮瀧のあるうれ小集橋　あり

大滝の野辺　巡幸記曰宮瀧ろひろ[illegible]ふ大滝の井名ことしく名所わ[illegible]

新古今

みよしの大滝の音名の高かりけるを[illegible]

新千載

うち潜る大川水の滝が原[illegible]

瀧御門　宮瀧の秋はの宮かるる[illegible]

万葉

東の瀧御門ふさもとさの[illegible]　王水瀧宮石　名所の名の枕ふ[illegible]

夫木

今ひとの氷し解ぬ玉ゐの瀧の宮石[illegible]　舎人等

瀧浦　藻塩草曰宗祇法師の注しるしあり瀧の裏ところ[illegible]

多藝津滝の内　奇枕曰大和國　名所之詳

夫木

こ芳野の瀧はの内の玉風小林代[illegible]　光朝

遊副川　吉野川の鷲名と仁覚抄曰ゆく川

夢回淵　御料荘新住村ふあり淵中ふ　奇名多俗小梅の同じ

神明井　下淵村の路傍ふ　大滝の淀　下淵村ふ　あり

[illegible]言字抄

法隆寺 今本村ふあり 推明天皇の皇孫 建王の塚と日本紀ふ久くしく 黒彦皇子

新漢南墓 同村ふあり 俗ふ天狗塚といふ 願輪王の塚と日本紀ふ久くしく

今本寺 同村ふあり 一名石光寺又名弥勒寺といふ 今ふ堂あり 年久しく頽廢しぬ

伯耆國ナ人ふ寺ふ住ひし蓮入法師寛弘年中初瀬ちこ籠て

観世音の霊夏ふ蒙て家ふ至て夜く光ありあやしやこそ

りく見ふ巌上ふ石板あり 岩窟埋んとする苔生義とり

石面の数巻ふて ひんとて弥勒ニ尊の像ふ彫ほけり

人工の業ふあらず則精舎ふ建て久しくりひく移て

祥瑞あらく入寂しとり 釋書

薬水井 茅原村ふあり 夜疫ふ則験あり むしより邑人長壽のもの多し

幡神祠 拾垣ナ村ふあり 北荘七村の氏神ニ

比蘇寺 池田荘比曾村ふあり 一名現光寺 推古天皇ニ年四月淡路嶋の海中より浮

沈水香ふ帝ふ献て聖徳太子これふ焚ひ実ふ雑香乃めく

その花ニ千ニその瞻ふ茅陸ニ水ふ流く久しくふ流水といひあり

入くくしくわふ法香と申と奏ひ帝歓びたりく

く観音の像ニて世寺ふ住ふ時く光明ふ充ちる

ニ月ニとあり 釋書 そもそも現光寺とふづけらるとこれ 王林抄

栗天 一ニ書しる額あり 玉林抄ふ記しる今ふ西大寺の

興聖菩薩戒法ふ授くしく繁昌ふ破壊しく僅ふ遺とり

嶋天神祠 上宇中麻志の氏神ニ 苗荘麻志口村ふあり 椿井 麻志口ふ

宇治向山 千俣村 百系

宇治乃山 乃風ふ吹て 藤あり

吉野水分神社 丹治村ふあり 古く水分ふ坐せ 年くの洪水ふ崩と

神社ふ遷ふ文武帝二年ニ月神馬ふ出神ふ出り雨ふ祈て

ふ 世日本紀ふ見へたり 海嶽初筮吉野ニ僧表ふ社ふ 長屋王

六帖 侯ふ祈名ふ代実録出

丹治川 乃源 古ふ山ふ流ひ丹治 仮貝ふ祈く吉野川ふ入

寶之百首
みちの
東野の
春こそ夜
教定

安騎野　岩城下市二村の間にあり花貴人遊猟の地
万葉　吉野宮のかたにあり
あらの野に宿る旅人うちなびき寐も寝られず（おもふ）

東野　岩城下市二村の間にあり訓塵集曰東野の芳草の安騎の内うら
藻塩草に小菅妻野安騎野同名あるなの小野ともいふ
万葉　東野の煙立てるところ見てかへりみすれば月かたぶきぬ

烏帽子　岩城下市二村の間にあり
万葉　五吾妻野の宣みかたの時わたと紫ふまでる黄の下草

秋野川　下市川に流れ入る源吉野と
下市名産餅鮓　鮓の製其魚を盛る器
宮人秋沢年魚を吉野
諸邑にも多く出る
鮓の形状に似たり故に名とす其味美なり

願行寺　下市村にあり
立興寺　下市村にあり弥陀の名號ふるひ絵像
実如上人の裏書あり

瀧上寺　岩城村秋野の川瀧上にあり
清水寺　庚申清水村にあり

土田川　土田に至る吉野川に入
笠木川　源和泉国より流れ笠木桂を伐り出す丹生川に入

鎧岩　黒瀧荘中村にあり高丈余

高等上人墓　岩城村桂の谷に住し後に入寂を
黒瀧荘横尾村にあり

烏帽子　岩城村にあり一名
懐中抄　中山と云
深くねを賀茂の川の名ぶかくあり
ひとみなくなる

鳳閣寺　多田村にあり境内に宝殿印塔あり銘に曰正平二年二月建
俗称小白聖宝尊師の母の墓塚
茅金嵩　槇原村にあり奇峯高く聳へ
倉瀧　黒瀧村にあり絶壁あり千尋の中に飛流を
常學寺　黒瀧村にあり
後村上帝皇居　黒瀧村にあり俗に木仲所と云
傍に總福寺の故址あり
向加名生村にあり此賀名生の里を後醍醐天皇都を定
春日神祠　向賀名生村にあり後醍醐
鎮國寺　造立年勅願寺
後醍醐天皇皇居　加名生荘和田村にあり傍に華蔵院の故址に古樹あり
楠氏寄進と云
丹生山　丹生村にあり丹生荘に丹生瀧あり
丹生川　源吉野郡に入
丹生の瀧なたくく川波も月のかげをとどめて
は
稀々くくとなりぬ川本あれて水の金る丹生の根
名所
夏雨に丹生の川瀧のねとしひろぬふるとこと乃山源

冊生川上神社 冊生村ふあり 近藤四村の氏神なり 糸神 国象女神 ふるり
伊弉冊尊 河過槌の ふるふやの ふれ〳〵 絶なひね其 さうるん〳〵 祈人
の間小土神 槌と 祝おゝび 水神 国象女 かうみる人 日本紀 天武天皇白鳳
四〇の年 祈 〳〵 社ふ雨 かん霖雨 かやゝ 日の 勅使 ふられ
の四 犯ふ ふ〳〵 ふる 神武天皇の御宮ふ ふ〳〵 磯城 と 賊 ありけ
帝 足 分 追 ふ ん〳〵 牛牧 巌 ふ ふ〳〵 冊 の川上ふ のぼりゆ〳〵て
天神地祇 を ひ ふ ふ〳〵 日本紀ふ ふ〳〵
冊生寺 冊生村ふあり 櫃岳 貝原村ふあり 善徳寺 補正 分 て 我功 ある人 ふる
白銀嶽 古田荘夜中村ふあり 銀 ふ ふ 南 ふ 嶽 ふ ふあり
波賀神社 銀の岩あり 今 神 蔵宮 と 称 に 古田荘
十二村の氏神 氏神名 此 二代実 録出
檜 河の迫川 名 原 檜 河の迫の岩 ふ
波比賀神社 檜村の西ふあり 今 芙金岳宮 と 称 に 境内ふ 安満 て 槐の墓 あり
鷹巣 と 立川 波村ふあり 山頂 高く そび 樹木 森 ふ ふ 鷹の巣 あり 故ふ
名 ふ ふ 中ふ ふ 呑 嶺 あり 大 彩川 の 源 ふ

立川渡坐神祠 立川渡村ふあり 今天王と称を 禅龍寺 立川渡村ふあり
宗川荘十一村の氏神 ふ
乘鞍山 矢谷村ふあり 白瀑布 西北村ふあり
天川 荘 和田村ふあり 高十八丈
龍山 中ふ 岩あり 九丈 惣門瀑布 坪の内村ふあり 樹 青 秀 ふ ふ
伊波多神社 和田村ふあり 今 立和宮 と 称に
稲邑嶽 天川荘 洞 の 奇観 ふあり
朝鮮嶽 稲邑嶽の西ふあり 樹木 深 ふ
平且 ふ れ ふ 臨 ば と 久 鮮 と 名 ふ
天川 名水 水 ふ と 上 嶽 ふ 流 と 洞川の北 ふ 流 ふ 名 ふ 合 て 至 り
長秋詠藻 衆渓 と 合 て 村 ふ 紀 く 清水 ふ 至 く 十津川 と 入
右 ふ ふ ふ や ち る ふ ん ふ る の 川 ま 乃 つ み ふ ふ ふ ち る ふ 活 後成
龍泉寺 洞 村ふあり 上の村人多 に 寺 ふ 清泉 ふ り
燈籠洞 洞川村ふあり 教百 ふ 流 と 内 て 泉 ふ り ふ る ふ 小 池 と る
おゝ人 泉源通 ふ 龍泉寺 の ふ 弗出 に と 上乃 滋人 多 ふ
十洞 て 入 る の ふ
傷 と ち る る
将軍塚 十二村荘北俣村ふあり 石碑 十三 ふ り ふ 龍 ふ 羅列 に 里人 毎 年十月
六日 ふ 祭 犯 つ ふ 或 曰 将軍陸良王の墓 と 人
池津川 ふ 源 池津川の 中 ふ り ふ る ふ
中 は 川 て 至 く 大 俣 川 ふ 入

大峯天河社

本社

弥山嶽

大神宮

高倉山

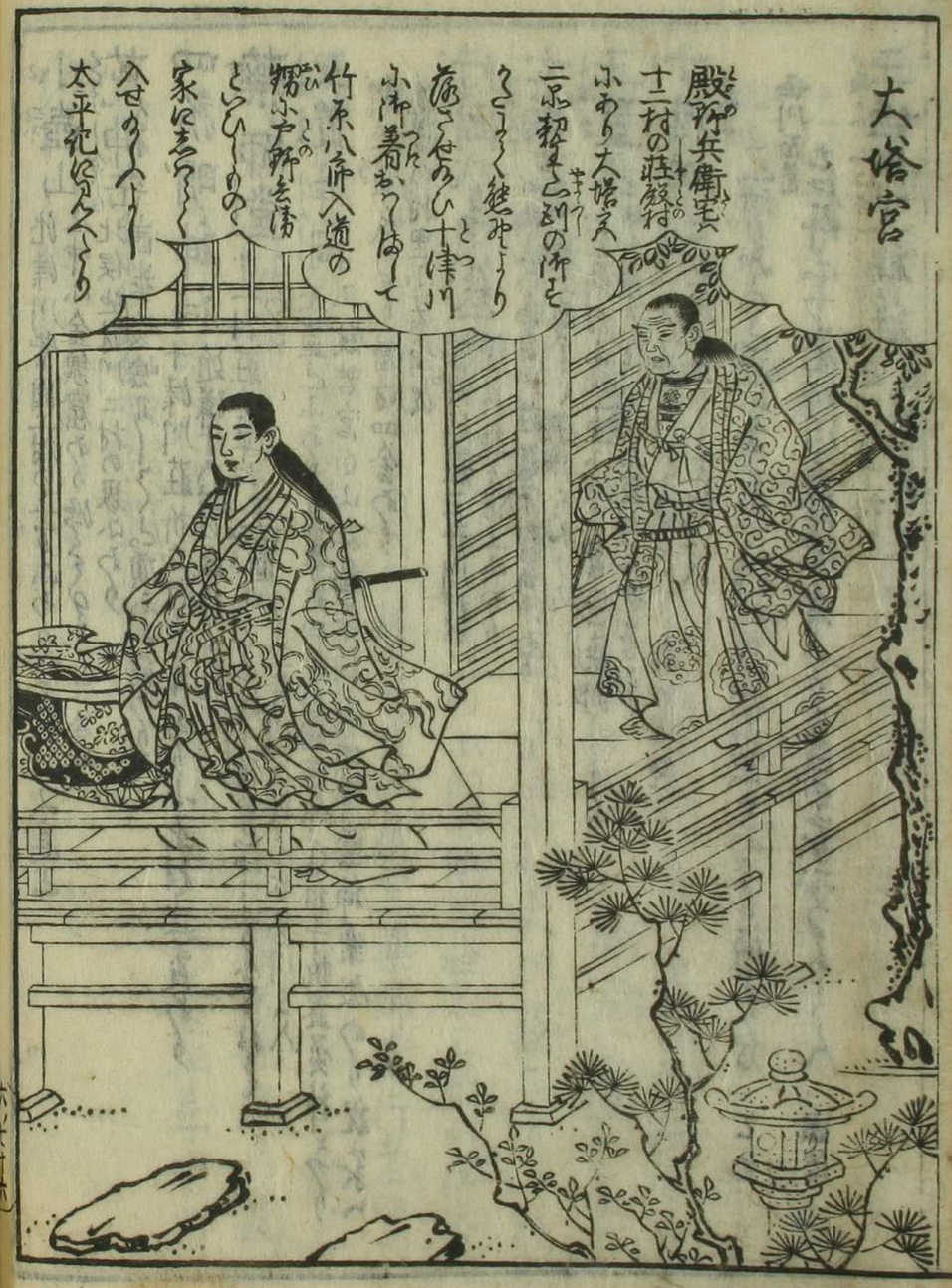
五鈷天

東京業平の名
天の川は石窟
入定しなり
海はおい
入へくり
惣門ヶ滝

天ノ河
法隆寺
天皇
御所坊
聖徳院
八

琵琶山白飯寺　天川坪内村ニ有ル　役行者大峯の嶮路を分け給ふ時
先ヲ導き給ふ霊験を禱り給ひし小岩窟ニ清泉湧出ス　神霊
田光丸ハ此所ニ庵を結ひ琵琶の響音あり人心の迷雲を晴し
より琵琶と号せり其後弘法大師ハ此所ニ来り千日の修法を
為し天女現し給ひしを其尊像を彫刻し神霊を鎮めなる
天川弁財天是なり　宗像神祠　崇む天川荘二十一村
氏神なり正殿拝殿御厨所十二の小祠四箇の怪石ニ所の清泉
あり寺内ハ妙吉院と号し観音堂地蔵堂薬師堂行者堂
護摩堂二重宝塔僧舎ニ宇　理性院　神福寺　来迎院　あり又護良親王
寓居の所ハ御所坊と云ふ　別来迎院　又什宝蘇悉地経乃跋
書ハ僧正仁海の化疏一章ハ法門秀海師と共ニ正平年中乃
綸旨元中九年中務卿の令旨等あり
池津川神祠　池ハ川村ニ有り　坂本村ニ有り　文安元年の祭式あり　乾と　紀州の畏り

小壺山　池津川紫園二村の上方ニ有り一名金山又高と
ハ中ハ金鑛窟あり深さ九二十余丈
荒神岳　北俣池ハ川二村の界ニ有り　酋峯峻嶮
四所明神祠　十津川荘折立村ニ一座あり小原村ニ一座あり
辺濃十六村の氏神なり
薬師堂　十二村荘堂平村ニ有り　玉置川ハ源玉置の山中ヨリ流れ
玉置神祠　玉置と云ふ　舊事紀曰紀伊國忌部遠祖手帆置負神あり
正殿若宮白山社稲荷の祠あり　池津川荘玉井川ハ流れ安居川ニ入
別玉置氏あり僧坊四舎あり
辺濃の村里ハ居住ス
行岡八帝墓　十津川荘玉井川村の
管内経尾の上ニ有り
七面と　御所ノ西舟川荘鶴形村の東ニ有り
七家お連くく蓮華の山
玉置と　玉井川村西北一里ニ有り岩窟森然たり
中小川及窟中山土室多の別峯あり
十津川　名水あり天の川の下流なり諸村ハ流れ
支本　辺濃村ハ至りて沈別ニ入
一云方丈の山ハ此所ハ十津川の別名ハ宗教あるを浮世ハ　公約
坂川百首
右所と十尾ハ川上ニ源流あり氏の家あるべし　國信
玉垣内坐神社　西川谷十村の氏神なり


大塔宮
殿ハ兵衛宅ハ
十二村の荘園ハ
ふあり大塔宮
二京都ヲ乙刻の御ゑ
くとゝく建ゆゝり
ゑ〻せあひ十津川
ふ御着ちつはゝて
竹原八郎入道の
嫡子郎左衛
とゝひしゝの〻
家にちゝ〻〻
入せのゝへゝ
太平記ゑんゝり

その末家今の世ゝも
ありゝそはゝへ

高瀧 高勝村ふあり 十二瀧 七久村ふあり急流飛瀑多しく十二曲あるく流れ

中村坐神社 十津川荘中村ふあり今王子権現と称に中葛川祢仁小川之勝名の氏祢

小松山 十津川荘葛川の南ふあり 行者嵩 小森村ふあり上ふ名くらの嶺部とも

湯原温泉 二所ふあり一所は十津川荘湯原村ふあり一所は同荘武蔵村乃東泉寺ふあり浴する時は別痼疾ハ治に湯原ふる類字名所

ふ大和國ふあり十津川の温泉ふこ也伝くに

宮ふ嶽田と云くに

嶽田の温泉ふこ也くに

類字名所玉葉集

湯の原ふ時芦八ふいつ所ふ

無終山 十津川荘栗畑村西南ふあり谷幽こうく巖遠し故ふ

泊船集 大和紀伊のさかひにてふ

牡丹の咲れ礼ふ

名ふ料理つ

ふ書つけ侍る

紙乃

去来

和田峯 上湯川村の上方ふあり紀州の界ふ

寒所川 ふ源熊野の山中ふ流るく芋瀬川ふ合し

こ浦内ふ流く十津川ふ入

こ浦坐神社 祢所川谷六村ふ氏祢ふ 山西坐神祠 熊尾新宮と称に山西

芙精山 瀬原村ふあり山の形嵯峨として紀州の界ふ

瀧川 ふ源釋迦岳ふ流るく 蘆瀬川 ふ源地蔵岳ふ流るく

清納瀑布 十津川荘大所村川分坐神社 ふあり高十丈計 熊野寺戸 服川堂原

御吉所村名の氏祢ふ 瀧尾坐神社 國王宮と称に大川荘

天神祠 一所ふあり一所ふ弓土村ふあり字井清ふ名の氏祢ふ

伯母子嶺 今ふ名村の南ふあり十津川荘瀬原村の界ふ

大清ふ 小清ふ 俱小十津川荘小原村ふあり

芋瀬 瀬原村ふあり

山崎坐神社 氏神ふ

寶蔵寺 十津川荘五百瀬村ふあり俗伝曰 平維盛の建立ふ

平維盛墓 十津川荘武蔵村ふあり姓名不詳

佐久間信盛墓 十津川荘武蔵村光明寺ふあり石碑あり 天正四年七月十二日卒に

白屋嶽 白屋村上方ふあり　高系と 高系村の上方ふあり

備後と 北と荘に於て村ふあり紀州界と頂険峻こゝ

おなじ一日ふ断と顛ふ至り

出谷川 真弧村小至り西川ふ入

西川 来畑小至り十津川ふ入　風屋瀧 風屋村ふあり 長サ二十丈

小井瀧 来畑村ふあり　小系瀧 小系村ふあり紙居石頭ふあり 絶ゆ魚ふ漁獵に

備後川 紀州より流れこゝ大塚ふ至り

東川ふ入

憩息石 小系村茶店の前ふあり俗曰 護良親王の休息ありし所

池峯池 北山荘池峯村の山頂ふあり混水藍のみゝ樹木環繞

池峯坐神祠 池明神と称に北と荘八村の氏神なり

河津國王神祠 二度林村ふあり本宮と称に境内ふ神宮ふあり

別宮ふ上ル池村ふあり迎藤七村の氏神之

林泉寺 北川荘白川村ふあり

異像瀧 長敬村ふあり深淵清碧こゝ形容 美観あり

水分神祠 小敬村ふあり北と荘五村相共ふ敬ふ

白瀧と寶泉寺 北山荘西郷村ふあり本尊観世音こゝ我の瀧の記ふ曰南方勅願寺紀州牟婁郡熊野の奥北山の内泉村興泉寺永亨九年丁巳二月建立角山車僧と書に興泉寺乃故蹤ハ今当院の東ふあり又西ふ瀧あり高サ二十余丈

王住山龍川寺 北と荘小敬村ふあり偽曰南帝皇居の古址之後ふ当院こゝ

神位康正三年丁丑十二月二日又遺教経 跋曰寶德二年庚午之秋建當寺云云

芋瀬荘司宅址 ふあり

竹原八郎宅 谷敬村ふあり大塚宮護良親王こゝに寓居に左平紀ふ召ふ人

尼妙圓宅 小来村ふあり妙圓大塚宮ふ仕ふ人

池原川 一名北と川こゝ東川西川ふ入　池原ふ金こゝ来系の属村

小井ふ口ふ狩こゝ紀州ふ入

佐田川 真弧村小至り池原川ふ入　佐田来系大里ふ狩こゝ

葛川溪 真弧村小至り池原川ふ入　葛川ふ狩こゝ

神と小至こゝ安曽川ふ入

安曽川 真弧北と より流れこゝ紀州ふ出又神と属絶安居ふ入こゝ

安居の上ふと今一国界ふ遠り竹筒村ふ過こゝ紀州ふ入

栃本渡 来畑村ふあり　獨木梁 小系村ふあり溪中の處々ふ跨ぎあり十津川ふ入

西川ふ海ふ

上渡下渡 俱ふ池原村ふあり　神と渡 田戸村ふあり北と川ふ竹筒村ふ海ふ

東川ふ流れ

山上者毎年四月八日
より九月八日まで諸人信
をする日毎に数万人入
峯宿す十日嘉安祭
より山上まで六里あり
七月の祭は山當山乃
修験道の山伏入峯に
峯中に二百八十所の
岩窟あり蟹嫌窟
聖天窟菊窟笙窟
編幅窟あり大
あり蟹嫌窟は源
義経二町余窟の
奥に池あり
菊窟は乃
岩こもり

菊の紋なか
せりもち外修
験道の秘所
うれべくや
もくこるるかー
小松組

山上山嶽　大和志曰吉野山より南六里洞川の東南にあり　山勢高峻にして霜雪巌洹より山頂に淨刹あり其あひだ山路嶮岨にして大天上に天上乃二岑を踰ゆ是は今宿の茶店あり　多古村小屋に属す　又洞辻の茶店あり　洞川村に属す　より大鞍掛小鞍掛の二坂を歴て鐘懸岩西臨岩なんどいへるに至る巍々たる梵閣あり本尊蔵王權現役優婆塞を安置す又古幢あり　猿楼ともいふ堂の椽にあり其銘に曰遠江國佐野郡原田莊長福寺天慶六年七月二日云云

金葉　大峯にて

もろともにあはれと思へ山桜花より外にしる人もなし　僧正行尊

玉葉　修行し侍りけるに　大峯にて

時ならぬ外山のさへ名に晴やらぬ雲のうへの月かけ　僧正覺範

三面とも巨巌多くして南にあるを涌出岩といふ東北にあるを蟻の門渡と號し飛石東臨岩行道岩屛風岩等あり西の方稲邑嶽に望て僧舎六區あり吉野の山僧こゝに安居す又東行一里そよりに小篠といふ所に至る則行者堂聖寳堂護摩の石壇大黒石窟あり

山家集　小篠のとまりと申所にて

分きつる小篠の露にそほちつゝほしそわつらふ墨染の袖　西行

又西南一里ばかりに脇宿といふあり一名篠の宿といふ

山家集　その宿にて

庵さす草の枕に友なひて篠の露にも宿る月かな　西行

又東のかた二里ばかりに普賢岳といふあり又東のかた一里余ゆけば児宿といふ所あり其東のかた二里ばかりに行者帰といふありて行これより二里八町に至りて御山といふありて又南五里ばかりゆけば則釈迦岳なり　北の方吉野山より南の方玉置山まで都くらくなり峯中といふ

行者かへりちごのとまりにつゞきたるすくの山伏は春風そこと申所なりけりそとばのおもてにおなじく行者ちごのとまりとかきつけもおなじくひとつにつけ侍りけるに

山家集

屛風にや心をたておもひけん行者はかへりちごはとまりぬ　西行

山家集
大峯の神仙といふ所にて月をみてよみける
深き山にすみける月を見ざりせば思ひ出もなき我身ならまし　西行

御山は山上嶽より東の方六里ばかりにあり層巒疊嶂として山路嶮しく所謂御嶽神仙といふは是なりといへり又御山より南の方十町許に大日岳あり又其東一里ばかりにして小池宿といふあり平地宿へ又東二里ばかりにあり是より二十町東に至るを轉法輪岳といふ又東へ二里十六町ばかり歩めば佛陀辻行善宿あり足ばかり過て天狗岳に至る

山家集
小池と申す宿にて
いかにして梢の隙をもとめえて小池に今宵月のすむらん　西行

山家集
あはれと申す宿にて月を見けるに梢の露のたもとにかかりければ
梢もる月もあはれを思ふべし光に具して露のこぼるる　西行

山家集
轉法輪のだけと申す所にて釋迦の説法の座の石と申す所を拝みて
此処こそは法説かれける所よと聞くさとりをも得つる今日かな　西行

天狗岳より東の方二里ばかりに地蔵岳あり其東二十七町ばかりに東屋岳といふあり是より東南十八町ばかりにして千種岳に至る一名仙嶽といふ又笠捨山ともいへり姥捨山に違へるなりといふ又西の方二里二十町に古屋宿あり其南一里十四町ばかり踰えて花折宿に至る其西の方に經尾といふ又西南二十五町ばかりゆけば土室岳にいたる又西南五町ばかりにして玉置權現立給へり

山家集
あづまやと申す所にて時雨の後月を見て
神無月時雨ふるやにすむ月はくもらぬ影もたのまれぬかな　西行

山家集
ちくさのたけにて
分て行く色のみならず梢さへちくさの嶽は心そみけり　西行

山家集
そとばのへと申す所にて姥捨の峯と申す所の見わたされて思ひなしにや月ことに見えければ
姥捨は信濃ならねどいづくにも月すむ峯の名にこそありけれ　西行

拾遺愚草
三芳野や姥捨の山も嵐もひとつにすむ夜さの曙　定家

世説曰
嵩山の北ふ窟のり晋人こに
くるの千日をくりあ〜て室内
ゆかさこ〜盃のあ〜時に
碁を圍むの老翁二人
あり晋人に一盞の酒菓
を進む忽蜀中に出くま
年をくく洛下ふゆる
之張華といへくわが
ゆく所謂仙館
飲くるものに
玉漿ゆへ人
くるものを
龍穴の石髓
をり果〜く
長壽をりと
我朝の山上嶽の
岩窟もくれら

山上藏王權現と役優婆塞金峯に一千日籠りて生身の藏王を
いのり給ひし地藏尊の像地中より涌出し給へり足優婆塞の御心を
叶はんとあらはれたる地藏菩薩なり伯耆國大山に花をめしこと其後
大野念怒の像なり六の御子なりを鉢にふさりの臂にいらけ
左の御子なりを五指にかりて御腰におさへ一眼大ひにして魔
障降伏の相なり右の御子なりを天地の經緯にあらはし
つるしはの人皇廿九代宣化天皇紀元年に優婆塞の御齡二十五才
うるうるひに十五童子涌出あり其八大童子なり
第一檢增童子 阿閦佛垂跡 在禪師宿
第二後世童子 師子音王佛垂跡 在多輪宿
第三虛空童子 虛空住佛垂跡 在笙山石屋
第四叡光童子 帝相佛垂跡 在篠宿
第五惡除童子 阿彌陀佛垂跡 在玉素宿
第六香精童子 多摩羅跋檀檀佛垂跡 在深山
第七慈悲童子 雲自在佛垂跡 在水飲
第八除魔童子 釈迦牟尼佛垂跡 在吹嶽
又七大童子なり葛城の峯に足とり涌出嶽にいらるる 西譽曼陀羅抄

それより尊像なり錦帳の中に獨さと其涌出の獅なり秘せんにそれに
優婆塞と天曆帝村上天皇とそのくそづくに二尊なり他さとそのなり
安重一生行人悪愛なり六十余別に若ろくに他なり足一此なり非一
賞罰なり二千世界に有ることなり惱一有なり利一有なり利一有なり明
檀延なりなりなり七千余座の利生のあるなり福ごとなり益一
亦無二の霊驗あり 太平記
役優婆塞と大和國葛城上郡茅原里の人なり高賀茂氏なり
舒明天皇六年に出誕給ひ若年なりなりひろく学び仏道に敬
しかり年二十二歳の時なりなりの岩窟に籠り藤なり衣なり松なり
なりひとのなりなり孔雀明王の咒なり唱へ五色の雲に乗り仙宮に遊
給へ二の鬼なりなり水なりなりなりなりなりなりなりなりなり
一言主神なりなりの石橋なりかけんなりなりなりなりなりなり
獄に入なり龍樹大士とあるなりなりなりなりなりなりなりなり

紙を敷きおよびあんぐ[illegible]を文武天皇大寶元年二月七日壽齡
六十八にて母父が[illegible]に入竹の葉が落ちうめく惜しみ海に入く
後日父の[illegible]を家に道昭法師と[illegible]ふわりし時新羅の山中に
してむくげる虎に遇しかその中に役行者の後身の虎わりく祠が
遷しとりて師錬和尚を足がけばりく[illegible]代のたぐひなき人なり
[illegible]りに西巻おそれどこの一夜ひぐれとなりて二の巻へ中
未臨しかくおりくるんの[illegible]をけとりて中華みくに出これ
化人なくおりはなりて水境ふんくり大寶元年入定より
今寛政二年に至りて千九十余年ふる
夫大峯役優婆塞ひくひくれひしより異痛はとくく
中級しかとて通路に荊棘のとぢたるを伐ふ醍醐の聖寶
僧正いくぐりて靈岳が空しくせんやいくく再び開基しかひ
しかうりはて遠とくもりて足聖宝の所のひくれり[illegible]

釋迦嶽御山の南五里一名轉法輪岳ともいへり郡内の諸山に秀でく最
雄峻みくく遠く眺めは磊狀基石が布がし
善鬼里北山莊十五村の内うり 本尾寺坂内ふうく 本と當山御入峯乃時は里り止宿
しかく
屏風巖善鬼村ふわり遠く眺めは屏風が立るがし
善鬼川家集の和哥おふ又くうり善鬼が經く白川の屬邑
釋迦嶽小代の邑ふ至く西川ふ入
都藍尼和州の人物志の其一人うり むかし右邪との禁ふ都藍尼と云化
女あり金峯とい茅倉の北みくく藏王權現の靈域うりて女人が
のぼくしわかいに我女人なりの道路ふ叶ず忽雷電霹靂とくく
わくんやとく大峯苦行の道路ふ叶ず杖が捨くり[illegible]其杖枝葉が茂し
通路がうしかく其所とくく杖が捨くり[illegible]其龍ふ乘して飛行せ
大木となりて又咒文が吐く龍が[illegible]
しかくて至りく龍もとくみえくれば都藍尼つどやさかぐり

いかりて巖かどをはなれ又躍りて中空に微塵
となる龍は池に入れば妙音菩薩の乘り給へる
其後の新仏なれば

大和名所圖會卷之六　大尾

大和名所圖會跋

佩蘭清先生責序其文曰山跡國
世從　人皇之肇代に鎮都久矣
英雄に地靈而功名之人傑不寡
古今云云地靈之笠に山祇
實祢尤五之福護四社之靈后宮
八乎に書淵に乎熾矣乎人傑也
貴吉備氏仲麿之輩而往に無除
拙豈曰天府之國哉　京畿

都而一千五百有餘葉ヤ故名區
勝蹟頗多矣或詠於和歌或咏於
詩賦亦ふ而舉而計矣越延寶中
村氏著和州舊跡幽考又ハ項勝
爲言欲撰大和名勝志而僅ニ分
許而沒矣予近年著都名所圖會
前後ニ而編倚ニ兎園而ハ流之樂
蓉亭告於予彼爲言之遺志廼得
兎草稿而ハ撰大和名所圖會七
卷唯憾如得王列之抱犢山ニ石
室ニ一書ふ求ハ林東ヤ敢非侍之
文史聊ハ幸ニ遺命而已

寛政之歳次辛亥皆四月

秋里籬島 福湘夕

畫工 浪花 春朝齋竹原信繁

大和志 芦河先生著 全部八冊

大和國名所大繪圖

神社佛閣名所旧跡土産名物隣國名所ゑがきたる絵圖よりすべて一枚摺全一冊

南都町圖

此圖ハ事記の神社佛閣町小路を除く旧圖よりあらため名所圖會に載せる後より日をかさねて通行板なり

大和巡覽記 貝原篤信著

吉野名所道枝折

此二書ハ大和の名所旧跡神社佛閣遺漏なく驛おのおの記せる是ハ紬ゆゑ大和の人と里人を待て業内に入て通行費なし　此名所圖會を求めんとする人ハ山中の峠より到てハ其所の人を案内者とすべし

靜嘉堂文庫

樂天堂 德藏丁酉

[illegible]